

## 作品の背景

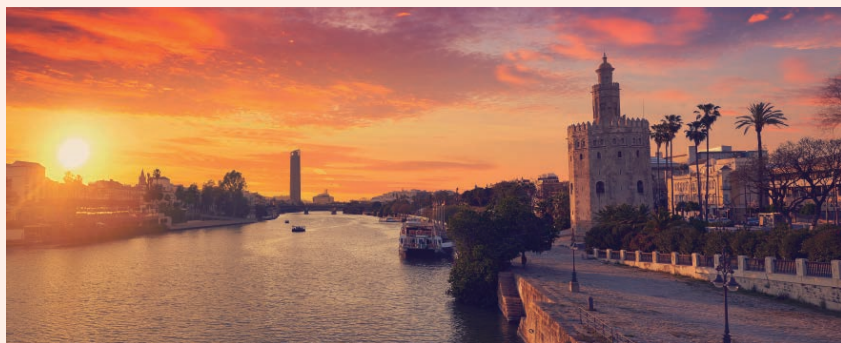
セビリャのカルメン  
——太陽、ロマ、闘牛士そして自由

文=澤田 肇

## 太陽の申し子カルメン(第1幕)

スペイン南部のアンダルシア地方は、地中海や大西洋に面した地帯では海岸沿いの良港に、山脈に区切られた内部では河川の要所に都市が発達した。この地方の中心都市セビリャは、8世紀から13世紀までイスラム王国が栄えた町である。15世紀末のコロンブスによる新大陸発見後はアメリカとの交易の拠点となった。18世紀後半から繁栄したタバコ産業の中心工場は今ではセビリャ大学のキャンパスになっている。

時代が変わっても、温暖で日照時間の長いこの町では、夕刻より大勢の人々が街路や広場に繰り出し、そぞろ歩きを楽しむ。19世紀にはあらゆる種類の物売りが呼び声を出し、子供たちは徒党を組んで遊び回る姿が常に目に入る。そうした群衆がそのまま舞台の上に登場するのがビゼーの歌劇であり、中でも際立つ存在が輝くように美しいロマのカルメンである。



『カルメン』の舞台セビリャの夕陽



## ロマとフラメンコ(第2幕)

15世紀のヨーロッパ各地に、肌の黒く、髪縮れた、異形の集団が出現したが、それはどこからやってきたのか不明な民族であった。放浪の民=犯罪者集団と見なされがちだったロマは各国で弾圧を受けたが、比較的寛容な国(ルーマニア、ハンガリー、スペインなど)には多数のロマが定着した。アンダルシア地方はスペインでもっともロマが集中している地域である。家畜の飼育や羊の毛刈りなどの季節労働が伝統的な収入源だが、19世紀の産業革命の時代にはスペイン人の下層民に混じて工場で働くロマも現れる。

フラメンコと言えばスペインの情熱的な踊りと誰もが思い浮かべるが、これはロマの音楽とアンダルシアの民謡が融合して誕生したものである。19世紀に歌とギターと踊りからなるフラメンコの様式が確立し、それを見られるフラメンコ・ライブ酒場が誕生したのはセビリヤだった。『カルメン』第2幕冒頭のリーリャス・パステアの酒場でもロマ女たちの踊りが見られる。

## 密輸団と闘牛士(第3幕)

19世紀末までヨーロッパの大部分の都市は外敵に備えて城壁に囲まれていた。町の門では入市税官吏が近郊の農産物から遠方の交易品まで持ち運ばれるものから税金を徴収する。申告を逃れて物資を町に運べばいい稼ぎになるので、プロの集団から堅気の兼業まで大小の密輸団が横行することになる。それは民衆にとっては立派な職業の一つなのだ。歌劇第3幕の冒頭では、密輸団の首領ダンカイロが城壁の割れ目から品物を運び込む算段をする\*。

\*編注：今回の上演ではこのダイアローグは省略される。



セビリアのマエストランサ闘牛場

19世紀のセビリアでは、男女、貴賤、年齢を問わずに闘牛は熱狂的に愛好され、開催前夜から庶民は街路に出て闘牛士と牛たちが通るのを見るのに良い場所取りをした。闘牛士たちは英雄だが、その中でも闘いの最後に剣を手にして牛にとどめを刺すマタドールが偶像視されていた。歌劇第3幕第2場の冒頭での闘牛士たちの行進の場面では、エスパダという同じ意味の別の単語で呼ばれるエスカミーリョが群衆から喝采を受けている。

### 自由と自立を求めたカルメン

『カルメン』の中で示されるセビリアの人間たちは、われわれが持つイメージに合うものだ。だがロマ社会の掟では、若い娘が集団を離れて一人で働くことも、ロマ以外の男と結婚することも許されない。一般のスペイン人社会においても、指輪をもらった後は、妻は夫に服従し、家庭を守ることが義務とされる。カルメンは社会にとって二重の越境者だったのだ。

今日、カルメンはオペラのもっとも有名なヒロインとなっている。19世紀には現実存在することを許されなかった、自分の好きなように恋愛をするカルメンは、望ましい男女のあり方を鏡のように照らしてきてくれたのかもしれない。自由と自立を求める、つまりは人間として当たり前の生き方をする勇気を見せたのがカルメンなのである。

さわだ・はじめ／上智大学名誉教授。朝日カルチャーセンター講師。1952年生まれ。主な著書に、『フランス・オペラの魅惑』、『パリという首都風景の誕生』、『舞台芸術の世界を学ぶ』、『『悪魔のロベール』とパリ・オペラ座』など。